

国境空間の未来像 —アムール川における建築計画を通じた共存の第一歩— The future vision for border spaces

佐藤信治¹, ○田永愛夏²
Shinji Sato¹, *Aika Tanaga²

Globalization is progressing rapidly in modern society, and the cross-border movement of people, information, and goods has become commonplace. However, border areas themselves still strongly characterize themselves as "boundaries," functioning as barriers separating two countries. In particular, in regions where natural features such as rivers and mountains form the border, physical and institutional constraints hinder exchange, and as a result, border areas tend to become depopulated and decline.

However, while borders are essentially "lines of separation," they should also be seen as "places of encounter" and "intersections where cultures and people intersect." If the lifestyles and spaces at borders can become platforms that promote coexistence between countries, it will be possible to redefine places that have traditionally been considered "boundaries" as "cores of exchange and creativity."

1. 計画背景

現代社会において、グローバル化は急速に進展しており、人や情報、物資が国境を越えて往来することは日常化している。一方で、国境地帯そのものは依然として「境目」としての性格が強く、両国を隔てる障壁として機能しているのが現状である。とりわけ川や山岳といった自然の地形を国境とする地域においては、物理的・制度的な制約が交流の妨げとなり、結果として国境地帯が過疎化・衰退していく傾向が見られる。

しかし、本来国境は「断絶の線」であると同時に、「出会いの場」「文化や人々が交わる交点」としても捉えられるべきである。国境における生活や空間が、国同士の共存を促進するプラットフォームとなれば、これまで「境界」とされてきた場所を、逆に「交流と創造の核」として再定義することが可能となる。

2. 敷地背景

本研究の対象敷地として、ロシアと中国の国境をなすアムール川流域を想定する。アムール川は全長約4,400kmに及ぶ大河であり、その多くが国境河川として機能している。兩岸には大小の都市や村落が点在しているが、国境



Figure 1: Amur River

し、氷上を介した非公式な移動や交易が行われるなど、季節的な自然環境と国境問題が複雑に絡み合う地域でもある。

特に国境橋梁付近は、両国間の貨物輸送や出入国管理が行われるインフラ拠点でありながら、その周囲は通過空間として利用されるにとどまり、人が長期的に滞在・交流する場所とはなっていない。したがって、国境の「境目」を超え、両国が共存する「場」を形成する拠点として、この立地は象徴的な意味を持つ。

3. 計画敷地

具体的には、中国の黒河市とロシアのブラゴベシチェンスク市を結ぶ区間を対象とする。



Figure 2: Planned site

両市間には近年ロープウェイが整備され、限定的な人・物の往来が可能となったが、恒常的な物流橋は存在しない。

本研究ではこの地点に新たに物流橋を計画し、それ

1: 日本理工・教員・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

2: 日本理工・学生・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

自体を目的とするのではなく、橋を媒介に市場、交流施設、臨時居住空間などの建築群を展開させることで、国境のあり方を再構築することを目指す。

4. 建築計画

4.1 コンセプト

国境という「境目」に滞留するのではなく、橋と川を媒介にして「両国が共に繁栄する拠点」を生み出す。ここから始まる拠点が、国境に行くほど賑わいが増すという新しい国境像を象徴する。

4.2 配置計画

軸：アムール川に新設する「物流橋」を中心に展開

- ・ 両岸接続：黒河市（中国側）とブラゴベシチェンスク（ロシア側）の都市機能に接続
- ・ 水上展開：川の上に浮体モジュールを設置し、市場・広場・居住を段階的に拡張可能にする

4.3 想定する利用者

- ・ 観光客：国境市場や広場、文化イベントに参加する短期訪問者
- ・ 地元住民：市場での物資交換や日常的な商業利用
- ・ 短期滞在者：商人、研究者、学生など両国を往来する人々
- ・ 交流者：展示会・祭り・音楽会に参加する文化交流者

4.4 主要機能

- ・ 経済：両国物資の国境市場、小規模ワークスペース
- ・ 文化：広場、展示・音楽・祭りの舞台
- ・ 生活：短期滞在用宿泊、飲食、最低限の生活支援施設
- ・ 交通：物流橋+川上デッキによる拡張性

4.5 利用と稼働想定

- ・ 平日：市場の営業、物流拠点
- ・ 祝祭日：文化イベント、両国合同祭り、展覧会
- ・ 季節変動：冬季は川の氷上を広場や臨時市場として活用

4.6 意義

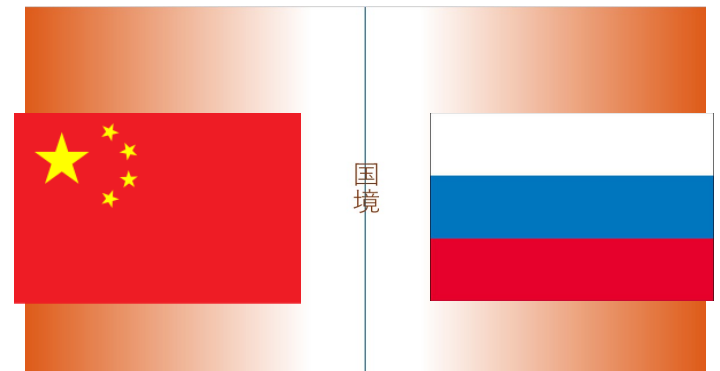
- ・ 村や町が商人の存在によって賑わった歴史を踏まえ、経済活動を起点として人の交流と定住を促進する。
- ・ 国境を「境界線」から「融合の場」へ再定義し、両国にとって対等な関係の象徴となる町を構築する。

5. 将来展望

本計画は、国境における最初の建築的な「実験」であり、国境をただの境界線ではなく、人々の往来や交流を生み出す場へと再定義する第一歩です。橋とそれに付随する建築群は、物流や経済活動を支えるだけでなく、文化や記憶を共有する媒介として機能します。

将来的には、この建築を起点として周辺に街が広がり、国境の両側で生活や産業が連続する「賑やかな国境都市」が形成されることを目指します。ここでは、人やモノの循環が新たな都市文化を育み、国境を「分断の象徴」から「協働と共生の象徴」へと変えていくことが期待されます。

最終的に、本提案が地域住民にとって国境をポジティブに捉え直す契機となり、国際社会においても国境のあり方を再考するモデルとなることを展望します。



6. 参考文献

- [1] Ogi, M., Tachibana, Y., Nishio, F., & Danchenkov, M. A. (2001). Does the Fresh Water Supply from the Amur River Flowing into the Sea of Okhotsk Affect Sea Ice Formation? *Journal of the Meteorological Society of Japan. Series II*, 79(1), 123-129. DOI:10.2151/jmsj.79.123
- [2] Verbitskaya, Z., Medvedev, M., & Kotelnikova, M. (2020). Sea Ice Variability of the Amur Estuary: Survey Data Analysis. In *Sustainable Development of Water and Environment (ICSDWE 2020)* (pp. 237-249). Springer, Cham. DOI:10.1007/978-3-030-45263-6_22
- [3] 松里公孝『中国の辺境を歩く—国境地域から見た現代中国』中央公論新社、2004年。
- [4] 松田康博『中露関係史—アムール川をめぐる国境画定の近現代史』岩波書店、2016年。